

フラクタルバイオロジィで気導力を実証!

統合医療センター福田内科クリニック
日本気導術学会顧問
福田克彦

生命とは、ダイナミックで永遠に変化するエネルギー変換のプロセスであり、生物学的相似性のフラクタル原理に従うといわれています。

この原理は「バタフライ効果」とも呼ばれ、行列式の1つの状態をわずかに変えるだけで、システム全体に大きな違いが生じる可能性があります。

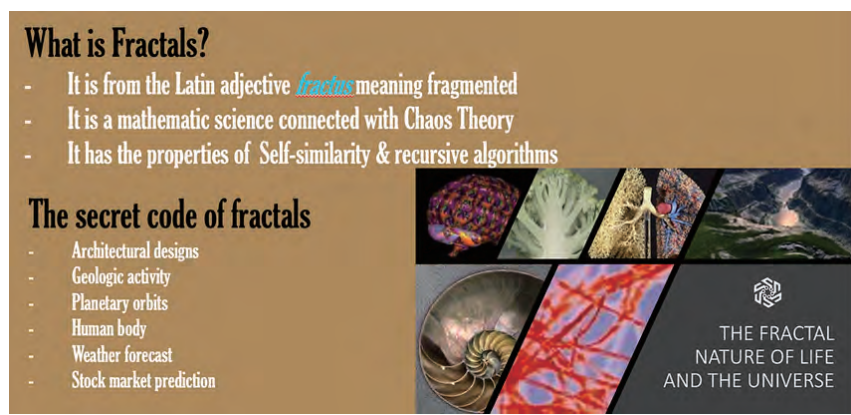


図1：フラクタルとは？ フラクタルに秘められたコード

ウェルビーイングや健康を決定する主要因は、私たち固有のバイオエネルギーの周波数と振動のエネルギー領域にあるといわれています。

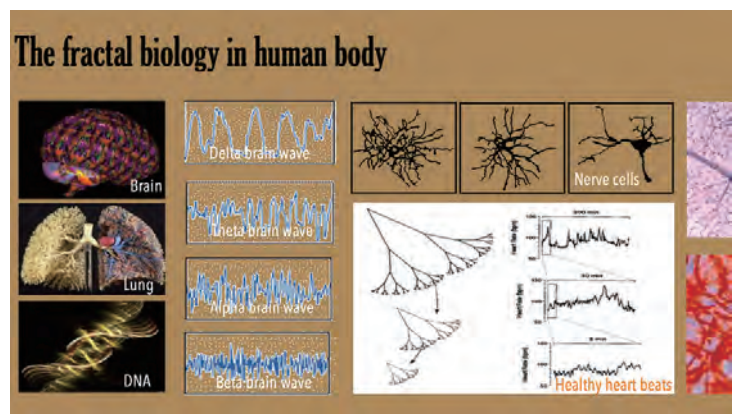


図2：人体におけるフラクタルバイオロジィ

このシステムは、脳波のパターンなどにおいて恒常性を維持したり、神経・心理・内分泌学的観点から環境変化や病的プロセスの影響を受ける高次システムを調節する上で重要です。

スウェーデンのCHIAWAKE NINGACADEMYの創設者であるJibin Chi博士によって開発された、CHIフラクタルシステム (www.chi-fractal.com) は、ストレスの父と呼ばれるハンス・セリエによって開拓されたストレス理論、ヒト生物学におけるフラクタルダイナミクス原理、心拍変動、そして独自のニューロダイナミクスソフトウェアとアルゴリズムを取り入れ、フラクタルダイナミック原理と高速フーリエ

人間の存在は生理的な身体の中だけでなく、概日リズムや日周リズムなどの外部環境とも同期・同調する多様なリズムによって特徴付けられます。フラクタルニューロダイナミクスは、外部および内部の環境の影響にตอบสนองして中央制御システムが発生する



Dr.Jibin Chiと統合医療学会にて

変換(FFT)アルゴリズム、科学原理に基づいた独自の健康分析の技術です。

各個人が独自の外観を持っていても、すべての身体部分の数学的分割は、普遍的に黄金比に向かう傾向があります。人体と心の動的非線形パターンは、健康のフラクタルな性質である黄金比(1.168)によって示された脳波、自律神経、ホルモン調節、心拍などの生体リズムは健康な状態で調和しています。このフラクタル構造へ凝集していく力は病気になると思われ

CHIIFractalでは、ストレス、脳波解析、自律神経系バランス、総エネルギー・エネルギーバランス、概日リズム、生体老化、チャクラ、経絡エネルギー状態などを評価できます。さらに、呼吸法や瞑想、施術や治療をモニタリングし、心身のエクササイズや競技の効率を制御するためのバイオフィードバック解析をリアルタイムで知ることができます。

トランスレーショナル医学の専門家として科学的探究から精神的な悟りへと医学を進展させ、糖尿病をはじめとする医学・医療のあり方を変え、人生の根本的な理解を促進することを提唱し、アンチエイジング、糖尿病、がん、エネルギー医学、ウェルネスなどに関するJibbin博士の新理論は世界各国の医学会等で発表され、昨年12月には日本統合医療学会で招聘講演が行われ、その臨床的検証については当方で発表させていただきました。

このたびは、本年1月14日に受講させていただいた、鈴木会長スペシャルセミナー前後で、CHIIFractal解析データがどのように改善したかを解説いたします。

以下のデータは、すべてセミナー前夜と1週間後のデータを比較したものです。

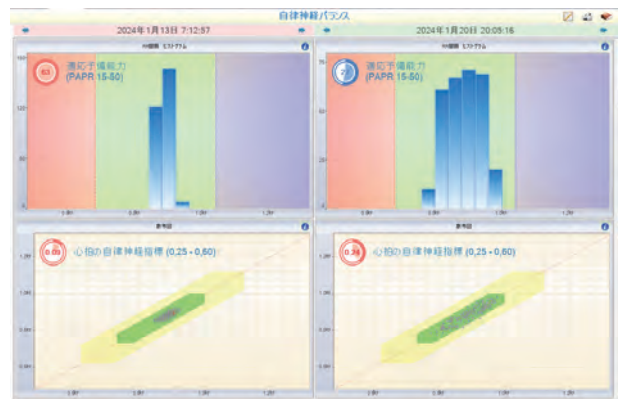


図3:自律神経バランス(適応予備能力と心拍の自律神経指数)

図3では自律神経の適応予備能力と心拍の自律神経指標を表しています。

適応予備能力を表すRR間隔のヒストグラム(上段の図)においては、適応能力に対する過剰なプレッシャーが負荷となっていた(左上の図)のが、7日後(右上の図)にはストレスに対する適応能力が増え、自律神経系のバランスが取れてきている状態になっていました。

心拍の自律神経指標(下段の図)においては、プロットが1点に凝集していた(左下の図)のが、セミナー1週間後には、右上に散布されてきている(右下の図)ことがわかります。これは自律神経系の調整が良好に推移して平衡状態になったことを示します。

パラメータ	値	標準範囲	パラメータ	値	標準範囲
心拍変動(SDNN)	66	(50-80)	心拍変動(SDNN)	65	(50-80)
SDNN (ms)	66.0	(50.0-80.0)	SDNN (ms)	65.0	(50.0-80.0)
RMSSD (ms)	54.0	(15.0-45.0)	RMSSD (ms)	28.0	(15.0-45.0)
CVSD	47.0	(10.0-30.0)	CVSD	44.0	(10.0-30.0)
HRV (ms)	724.0	(210.0-940.0)	HRV (ms)	111.0	(20.0-140.0)
VHR	5.0	(0.0-20.0)	VHR	0.24	(0.0-5.0)
HR	63.0	(10.0-60.0)	HR	27.0	(10.0-60.0)
トータルパワー (ms ² /1000)	261	(200.0-400.0)	トータルパワー (ms ² /1000)	25.0	(200.0-400.0)
LF (ms ² /1000)	24	(70.0-100.0)	LF (ms ² /1000)	40	(70.0-100.0)
HF (ms ² /1000)	17	(20.0-100.0)	HF (ms ² /1000)	190.0	(20.0-100.0)
VLF (ms ² /1000)	187	(80.0-100.0)	VLF (ms ² /1000)	67.0	(80.0-100.0)
LF/HF	1.40	(1.00-2.00)	LF/HF	0.24	(1.00-2.00)

図4:心拍変動のパラメータ

心拍変動(HRV)とは心拍間の時間間隔が変動する生理現象で、心拍変動は自律神経バランスなど身体生理機能制御の重要なパラメータを反映します(図4)。心拍数は呼吸の位相に影響し、心拍数は内外の環境刺激に対する生体の反応といえます。心拍の変化は、交感神経系と副交感神経系によって調節されます。

心拍数に変化なく不整脈がなくても、心拍変動に関してはセミナー後にも、心拍変動の合計の標準偏差である主に交感神経機能に反映されるSDNN (ms)がLFと共に、副交感神経活動を反映するRMSD (ms)がHFと共に増加しており、GSI/SIに表されている圧力調整システムへのス

ストレス負荷が減少し、トータルパワーと共に自律神経機能が高まっていることがわかります。

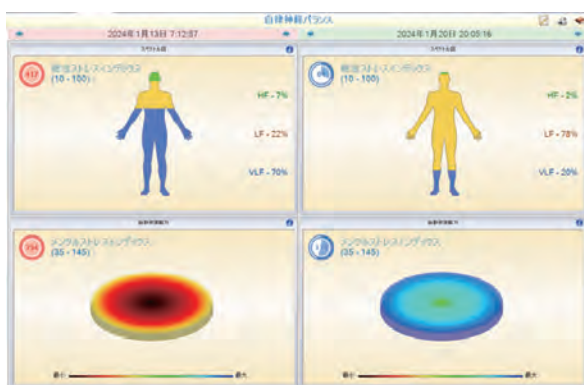


図5:総合ストレス/メンタルストレスインデックス

ストレスに関する自己相関(図5)において、上段は交感神経の活動に対応し、神経・心臓のコントロールをより速く作用・反応させるLF(低周波:黄色)、副交感神経の活動に対応し、神経・心臓のコントロールをリラックスさせるHF(高周波:緑色)、そして精神的関与やホルモン分泌の活動に対応し、緊張やストレスレベルを高めるVLF(超低周波:青色)で表されています。リラクセスしているときはHFの割合が増え、活動的または警戒状態にあるときはLFの割合が増加します。VLF信号は、気功や瞑想のようなホルモンの分泌や深い瞑想状態

にある特定の状況を除いては、できるだけ低く制御することが理想です。会長スペシャルセミナー後は、交感神経がより有意になっているものの、過剰なホルモンが制御されているのがわかります。

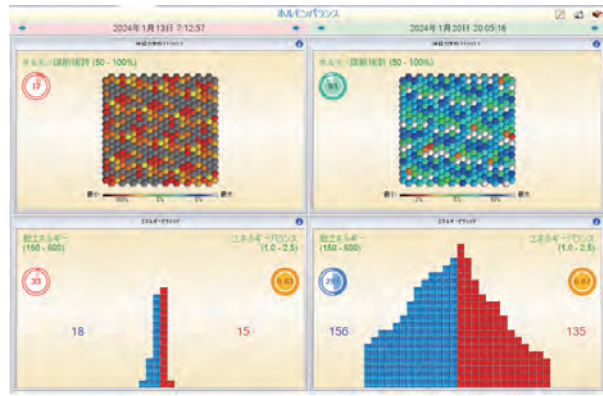


図6：ホルモン調節指数とエネルギーバランス

神経体液調節システムは、生体内の生化学的物質の組成と構造を調節して、長期にわたる内部環境の安定と変化する生活環境への生体の適応を保証しています。

図6では、生理的リズムを構成する神経学的な個々のマトリックス要素が、生物系のリズムに対応して、生物自然活動の共通普遍的指数法則にどの程度対応しているかのパラメータを示しています。

神経体液性調節指数は、生体がエネルギーと生理的資源をいかに最適に神経系が有効利用しているかを示しています。エネルギー・ピラミッドは、生物の生理的資源の全体的な総量と、資源の蓄積と消費のサイクルのバランスを示しています。

ピラミッドの左と右のセクションの間の相関関係は、体内で起こっている同化と異化のプロセスを特徴づけています。ピラミッドの青い部分は資源の回復時間に比例し、赤い部分は資源の消費時間に比例しています。

セミナー前夜に生理的資源の枯渇していたエネルギーピラミッドが、アカシックワールド自己エネルギー注入法やアカシック呼吸法を毎日繰り返すことで、10倍近く増えていることがわかります。

理想的な指数パラメーターは「黄金比」に合致しており、これらのパラメータを遵守することで、最適な高率で生命維持システムの最大限の効果的な働きが保証されます。

総エネルギー量(下の図の左の青いグラフ)のバランスある増加(下の図の赤いグラフ)とともに、ホルモン調節指数を示しているマトリックス要素(上の図)においては、リズムが攪乱されていた黄色く赤から、最適なリズムを表す緑から青へと変化していることがわかります。



図7：脳・心理・感情状態指数と脳波

図7において、精神感情状態タブ(上段)には、患者の精神感情状態のパラメータに関する情報が示されています。電気活動のスプラインマップ(SPLINEMAP)は、中枢神経系(CNS)リズムのピーク値の電気積分活動を、脳の機能空間における二変量分布の集合で表しています。

黒色と黄赤色の領域は、疾病状態、過労、ストレスの結果としての脳の活動低下を示しているセミナー前夜の強いストレス状態が(上段左)、セミナー後に最適の脳機能バランスに改善(上段左)していることがわかります。

精神感情状態指数(下段)は、ストレスが身体に及ぼす破壊的影響の程度を、脳波分析として表しています。

脳は人体の中枢であり、右脳は副交感神経や宇宙エネルギーや精神世界とのつながりに関係しています。典型的な右脳有意の波動はデルタ波とシータ波で、人の誕生時には有意で、創造的な才能を持つ人やスピリチュアルな修行者に最も多く見られます。左脳は論理的・分析的な側面で、教育や言語の発達した現代人に多く見られます。典型的な左脳の波動はベータ波とガンマ波で、冷静な思考とも関連しています。アルファ波は、左右の脳の活動をつなぐ調和のとれた脳波であり、地球の周波数と共鳴すれば平和と調和の感覚を生み出します。アルファ波は瞑想状態や熟睡後に見られるリラックス状態の始まりで、ピーク・パフォーマンスとも関連しており、プロのスポーツ選手やアーティストが高度に集中したパフォーマンスを発揮する直前に見られます。

ガンマ波は、一般的に周波数が20 Hzを超える脳神経振動パターンで、ガンマ波は瞑想後の意識の高揚、至福感、知性の鋭敏さと関連しています。瞑想者が子供のような好奇心や喜び、慈悲の感情を抱くなど、特定の精神的集中があると出現します。

私はアルファ波が有意になってもガンマ波出現に至っていないのは、まだ神通力への道への修業が足らず、鈴木会長のように、まだまだ高僧マスターの域に達していないのかもしれないですね。

自律神経系(ANS)は内臓機能、すなわち心臓、胃、腸などの内臓の機能を調節している末梢神経系の一部で、筋肉の一部も支配しています。ANSは心臓の鼓動、血管や瞳孔の拡張や収縮など、不随意的で反射的な自律神経機能を司令しています。

自律神経系において、副交感神経系(PNS)は恒常性と安静時の身体をコントロールし、身体の「休息と消化」機能を担っており、交感神経系(SNS)は知覚された脅威に対する身体の反応をコントロールするなど、「闘争または逃走」反応を担当しています。

アカシックワールド自己エネルギー注入法とアカシック呼吸法を毎日繰り返すことによって、生命活動力

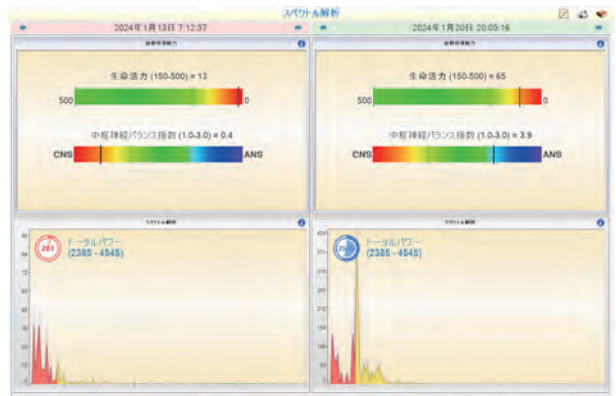


図8：生命活力とトータルパワー

図9上段のバイオリズム・フラクタル解析では、フラクタル構造を持つ身体の器官やシステムにおけるバイオリズムの調和の度合いを視覚的に評価し、機能的・病的変化の検出や生体の免疫状態など健康度の変化を予測します。

生体の生理学的プロセスを特徴づけるリズムの動的パラメータにおける規則性の類似性やリズムの一致度が決定されます。この刹那な調和の積み重ねを長期に維持する能力は、外的・内的環境条件の変化に対する生体の適応能力の質や免疫力に繋がります。

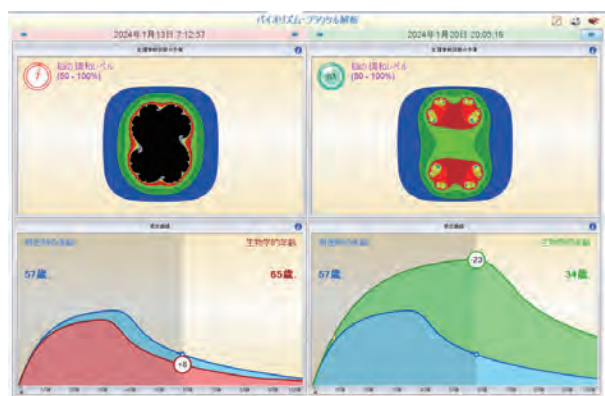


図9：脳の調和レベルと生物学的年齢

と自律神経を制御するトータルパワーがアップしていききました。

老年曲線(下段)は、生物学的リズムを反映し、その周期は平均余命によって決定されます。このグラフは生命資源の蓄積率と消費率の相関関係を図式化したもので、「黄金分割」のパラメータに相当します。暦年齢は体外にある時計によって測定され、生物学的年齢は体内時計によって測定されます。

加齢に関連する病気や死亡は暦年齢によって異なり、これらの病気の原因のほとんどは遺伝的なものです。したがって、人の本当の年齢は、生まれてからの経過時間ではなく、その人の生存能力を反映する要因によって決まります。

この生物学的年齢として定義されるのは、身体の生存能力レベルであり、生物学的年齢は老化の過程における生体の全体的な崩壊を表しています。深堀先生が重視される「魂年齢」は生物学的年齢よりもさらに上位の意識階層かもしれませんが、気導術での呼吸法による絶え間ないエネルギー注入法の習慣化によって、暦年齢よりも20歳以上、生物学的年齢を若返らせられる可能性があると思います。

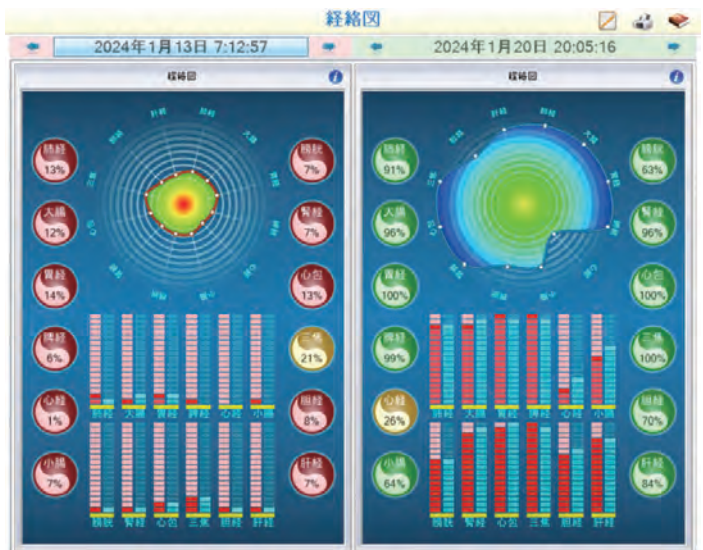


図10：経絡

図10では、新たな自己エネルギー注入とアカシック呼吸法を修得することによって、経絡の滞りが全体的に改善していることがわかります。ちなみにわたしの弱い心経や小腸経は五行メタファーでいえば喜び、愛、憎しみなどの火の感情、笑いの音声と関連しているといわれています。心経は血液循環にかかわる肩甲下筋のアンバランスと関係しており、論理的思考と直感、智慧や感情、葛藤や循環、コミュニケーションに障害を来たしている場合があり、肘内側の指圧ポイントや心経の墓穴である胸骨下のポイントなどへのマッサージや指圧と気導力に

よるエネルギー注入が効果的でした。



図 11：生体エネルギーフィールド

生体エネルギーフィールドは、黒体放射の性質をもったオーラーのコンセプトに近いものです。エネルギー場は、私たちの肉体の周りに存在する闇のエネルギーでもあり、免疫能力などの健康状態と密接に関連しており、内外環境に対する適応能力の質を高めて、生理的プロセスの調和を維持・保存する能力です。いつでも自然に生体エネルギーを高められ、輝けるオーラを放っていたいものです。



図 12：チャクラ活動図

セミナー受講前日のチャクラ活動図においては、第2チャクラ（スヴァディシュターナ／セイクラルチャクラ）（下から2番目のオレンジ色）が弱いことがわかります（図12左）。丹田に位置するこの第2チャクラは、自律神経や想念の具現化などアストラルレベルのエネルギー制御、活力や創造性、欲望や官能に関連しています。

腹腔神経叢に関わる背中・腰部の痛みや、盲腸、膀胱・腎臓・骨盤生殖器）、ライデン腺などに異常があるとブロックされやすく、幼少期からの母親との愛情や依存にも関係しています。

腹圧や足腰の関節や筋肉などの結合組織が硬く弱っている私の場合には小腸経／膀胱経の停滞とも関係があ

りそうでした。特に上下の丹田を意識したアカシックワールド自己エネルギーを注入法の習慣によって徐々にこのチャクラが開きつつあります。



図 13：機能的コンディションのダイナミクス

図13の機能状態の動態に関して、下段下のインジケータF Cは機能的指標状態の正規化された値を表示しており「A：生体または心臓の適応レベルを、B：自律神経バランスC：神経体液調節（ホルモンバランス）、D：精神感情状態を、H(Health)は…複合状態指数」を表しており、上段はセミナー前後における4つの機能的指標の1週間の推移を、下段左がサ

カダイアンリズムに関する時間的経過に伴う機能状態指標の変化の過程が表示されています。

これらCHIFRACTAL解析による客観的な指標は、毎日毎秒時々刻々と変化しておりますが、このたびのリサーチの様に逐一分析できなくても、我々のバイオロジカルな心身は日々絶え間なく変化し、暦年齢通りに自然と老化しているだけでなく、精神的にも生物学的にも瞬間瞬間で若返りを繰り返したり、いつでも即治療モードに転換できると感じることに大切だと思えます。

このたびのスペシャルセミナーで鈴木眞之会長から伝授していただいた叡智とパワー／フォースによって、学会員同志が宇宙と一体化した自然治癒力を一層高め合い、さらに唯一無二である至上の神通力を、ともに切磋琢磨し合える、気導術学会の明るい未来を祈っております。

